

講演会のご案内

「アナログ写真の発展と文化遺産としての写真の保存」 Development of Analog Photography and Conservation of Photographic Heritage

主催：国立アトリサーチセンター

開催日時：令和6（2024）年10月26日 土曜日 13:30～16:15（13:00 受付開始）

会場：京都国立近代美術館 1階 講堂

参加方法：事前申込制（80名先着順）(<https://forms.office.com/r/ycC1MmiaE4>)

参加費用：無料

交通案内：<https://www.momak.go.jp/Japanese/guide/hoursAdmission.html#access>

9月11日（水）
より参加受付開始



※英語から日本語への逐次通訳あり。

講演会の同時配信はございません。後日、記録動画をウェブサイトにて公開予定です。

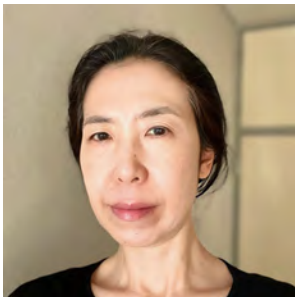
当講演会は、OKETA COLLECTIONのご支援、および公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の助成を受けて開催します。

写真は19世紀に発明され、ダゲレオタイプから始まり、コロジオン湿板、鶏卵紙、ゼラチンシルバークロームなど、さまざまな特性をもつ技法が次々と生まれました。これらアナログ写真は、歴史記録、芸術表現、その他さまざまな用途で身近に用いられた媒体ですが、非常に脆弱な材質から成るため、未来に伝達するためにはこれらの材料と構造を理解し適切に保存管理する必要があります。現代において撮影する写真はデジタル画像の場合がほとんどであり、アナログ写真を手にする機会が少なくなる中で、写真を文化遺産として保存するため、その特性に関する情報もますます貴重になっています。

今回は、日本より写真保存修復専門家の白岩洋子氏とフランスより写真保存修復専門家ゲノラ・フュリック氏をお招きして、写真の発展、そして保存と維持管理についてご講演を頂きます。

■講演者プロフィール

白岩洋子 SHIRAIWA Yoko



上智大学文学部フランス文学科卒業。1991年にイギリスの美術商に入社し、ロンドン及び子会社を設立した東京で13年間勤務する。美術品修復に興味を持ち、再び渡英。2004年ロンドン芸術大学キャンパウェル・カレッジ・オブ・アーツにてペーパー・コンサベーションのディプロマを取得。帰国後は株式会社絵画保存研究所に勤務し、2010年に白岩修復工房を開業。紙作品及び写真作品の修復を専門として行う。Bertrand Lavédrine, “Photograph of the Past - Process and Preservation” 『写真技法と保存の知識』（青幻舎、2017年）の翻訳を手がける。

ゲノラ・フュリック Gwenola FURIC



フランスの国立高等写真学院（École Nationale Supérieure de la Photographie, Arles）、および国立文化遺産研究所（Institut National du Patrimoine, Paris）で修士号を取得し、写真を専門とする保存修復家となる。主にフランス西部の文化財や文化施設のコレクションを対象に、予防的保存・維持管理のプロジェクトや専門的助言、保存修復処置に携わる。後進の育成にも力を入れており、レンヌ第2大学では、保存修復全般に関する講義を定期的に行う。フランス保存修復専門家連盟（Fédération Française des Professionnels de la Conservation-Restauration）の地域代表など、保存修復に関する議論にも積極的に参加している。

■講演会プログラム

13:30	開会挨拶
13:35	趣旨説明
13:40～14:20	講演 1: 白岩洋子「進化する写真－その技法と表現を追う」 40分
14:20～14:30	質疑応答
14:30～14:45	休憩
14:45～16:05	講演 2: ゲノラ・フュリック「文化遺産としての写真の保存と維持管理」(逐次通訳あり) 80分
16:05～16:15	質疑応答
16:15	閉会挨拶

講演 1	白岩洋子「進化する写真－その技法と表現を追う」 SHIRAIWA Yoko, “Evolving Photography — Exploring Its Technique and Expressions”
-----------------	---

19世紀に西洋で写真術が誕生して以来、写真技法は常に社会と密接に関わりながら発展を続けてきた。日本においても独自の歴史のおよび芸術的な写真が生み出され、これまで豊かで多様な写真遺産を残してきた。幕末に海外向けに制作された手彩色の鶏卵紙から始まり、明治時代には湿板写真が普及し、撮影された肖像写真は桐箱に取められた。その後、20世紀に入り、カメラや印画紙が一般に流通し始めると、新進気鋭の写真家たちが活躍する豊かな時代が到来した。この講演では、写真技法と制作の発展を追いながら、世界からも注目される魅力的な日本の写真を紹介する。それらの意義と価値を理解することで、写真が持つ力と、写真を次世代に残していくことの重要性を伝えたい。



講演 2	ゲノラ・フュリック「文化遺産としての写真の保存と維持管理」 Gwenola FURIC, “Conservation and Care of Photographic Heritage”
-----------------	---

アナログ写真を構成する材料が恒久性に問題を抱えていることは、ずっと前から知られていた。しかし、20世紀に入り写真が文化遺産であると認識されてから、写真材料の保存と修復に関する疑問が生じ始めた。まず1970年代のアメリカ、次いで1980年代末にかけてのヨーロッパ、そして他の世界中の国々にも少しずつ写真の保存修復に関する高度な教育課程が設立された。今日、写真遺産の保存はそれ自体で独立した専門領域である。当講演は、写真の劣化の問題、保存技術の適用により対応した解決策について事例を紹介しながら紹介する。



■お問い合わせ

独立行政法人国立美術館 国立アトリサーチセンター 作品活用促進グループ
Mail: collections@artmuseums.go.jp